

主 題：ヨブ記から学ぶ①

聖書箇所：ヨブ記 1章1－12節

テ ー マ：正しい者にも苦しみがあります。その時、あなたは何に目を留めますか？

きょうは皆さんと一緒にヨブ記1：1－12を見ていきます。

ヨブ1：1－12

「1 ウツの地にヨブという名の人があった。この人は潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっていた。：2 彼には七人の息子と三人の娘が生まれた。：3 彼は羊七千頭、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭、それに非常に多くのしもべを持っていた。それでこの人は東の人々の中で一番の富豪であった。：4 彼の息子たちは互いに行き来し、それぞれ自分の日に、その家で祝宴を開き、人をやって彼らの三人の姉妹も招き、彼らといっしょに飲み食いするのを常としていた。：5 こうして祝宴の日が一巡すると、ヨブは彼らと呼ばい寄せ、聖別することにしていた。彼は翌朝早く、彼らひとりひとりのために、それぞれの全焼のいけにえをささげた。ヨブは、「私の息子たちが、あるいは罪を犯し、心の中で神をのろったかもしれない」と思ったからである。ヨブはいつもこのようにしていた。：6 ある日、神の子らが【主】の前に来て立ったとき、サタンも来てその中にいた。：7 【主】はサタンに仰せられた。「おまえはどこから来たのか。」サタンは【主】に答えて言った。「地を歩き巡り、そこを歩き回って来ました。」：8 【主】はサタンに仰せられた。「おまえはわたしのしもべヨブに心を留めたか。彼のように潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっている者はひとりも地上にはいないのだが。」：9 サタンは【主】に答えて言った。「ヨブはいたずらに神を恐れましょうか。：10 あなたは彼と、その家とそのすべての持ち物との回りに、垣を巡らしたではありませんか。あなたが彼の手のわざを祝福されたので、彼の家畜は地にふえ広がっています。：11 しかし、あなたの手を伸べ、彼のすべての持ち物を打ってください。彼はきっと、あなたに向かってのろうに違いありません。」：12 【主】はサタンに仰せられた。「では、彼のすべての持ち物をおまえの手に任せよう。ただ彼の身に手を伸ばしてはならない。」そこで、サタンは【主】の前から出て行った。」

1. 序

ヨブ記が書かれた年代、また著者についてはよくわかっていません。さまざまな説があり、確定したものがないということです。また主人公であるヨブについても、どの辺りの年代を生きた人物なのかもよくわかっていません。しかし、エゼキエル14：14、20では、ノアやダニエルと一緒にヨブの名が記されていること。またヤコブはヤコブ5：11でヨブの忍耐について記していることなどから、ヨブが実在した人物であったと考えられます。エゼキエル14：20にこう書かれてあります。「たとい、そこに、ノアとダニエルとヨブがいても、——わたしは生きている。神である主の御告げ——彼らは決して息子も娘も救い出すことができない。彼らは自分たちの義によって自分たちのいのちを救い出すだけだ。」、また、ヤコブはヤコブ5：11節の後半で「……あなたがたは、ヨブの忍耐のことを聞いています。また、主が彼になさったことの結末を見たのです。主は慈愛に富み、あわれみに満ちておられる方だということです。」と記しています。ヨブは確かにある時代を生きた人物でした。

このヨブ記1章は四つの区分に分けられます。1－5節、6－12節、13－19節、そして20－22節です。きょうは1－12節までを見ていきたいと思えます。

2. ヨブという人物 1－5節

2017年度版の1：1には、こう書かれてあると思えます。「ウツの地に、その名をヨブという人がいた。この人は誠実で直な心を持ち、神を恐れて悪から遠ざかっていた。」、ヨブは「ウツの地」に住んでいたと記されています。この「ウツの地」の正しい場所はわかっていませんが、有力な説としてパレスチナの

南東のエドムの辺りではないかと言われています。このエドムの地は、モーセが羊飼いと住んでいたミディアンの地の北の方にあたります。そのようなところにヨブという人物がいたということです。

A. ヨブ 1節

このヨブについて1：1でこう書かれています。「この人は潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっていた。」、この「潔白」は「完全」を意味することばです。ですから、神が人に求められる律法、あるいはおきてを完全に守り行っていたということを意味しています。「正しく」は「まっすぐ」を意味しますので、「右にも左にもそれないこと」を表しています。また「神を恐れ、悪から遠ざかっていた」は、畏敬の心を持って神を礼拝し、神の忌み嫌われる悪から身を避けていたということです。ヨブ28：28には「こうして、神は人に仰せられた。「見よ。主を恐れること、これが知恵である。悪から離れることは悟りである。」と書かれています。この1節に書かれてある様子を見ると、ヨブは徹底した正しさ、また敬虔さを明らかにしています。ヨブは人間として可能な限り欠けたところがなかったということです。しかし、ヨブも罪人のひとりでした。3節では「東の人」と記されています。それは、ヨブはイスラエル人ではなかったということです。しかし、ヨブはいつも神に従い、神のおきてを守り、また神を恐れ、悪から身を避けて生活していました。そして、ヨブはその富の中にあっても神を忘れることがありませんでした。ヨブの信仰心は本物だったのです。

皆さん、私たちはどうでしょうか。私たちは苦しい時には神を見上げて「神様、どうかこのような私を助けてください」と祈ります。しかし私たちの生活が満たされ、何不自由なく暮らしている時には、私たちは時に、神を忘れてしまうことが多いのではないのでしょうか。ヨブの信仰は、いつも神を見上げていたということです。使徒10：35にはこう書かれています。「どの国の人であっても、神を恐れかしこみ、正義を行う人なら、神に受け入れられるのです。」と。

私たちは旧約でこのヨブと同じような人物を知っています。それは、ノアです。創世紀6：8-9にこう記されています。「：8 ……ノアは、【主】の心になんかっていた。」と。主が喜んでおられたということです。「：9 ……ノアは、正しい人であって、その時代にあっても、全き人であった。ノアは神とともに歩んだ。」と。ノアもヨブと同じように神に従順に生きた人物でした。

B. ヨブの信仰の姿 5節

そしてヨブ1：5を見ると、そこにヨブの信仰の姿を見て取ることができます。「こうして祝宴の日が一巡すると、ヨブは彼らと呼び寄せ、聖別することにしていました。彼は翌朝早く、彼らひとりひとりのために、それぞれの全焼のいけにえをささげた。ヨブは、「私の息子たちが、あるいは罪を犯し、心の中で神をのろったかもしれない。」と思ったからである。ヨブはいつもこのようにしていた。」と書いています。「聖別する」とは、「神のために特別に分け離すこと」です。出エジプト13：2にはこう書かれています。「：2 「イスラエル人の間で、最初に生まれる初子はすべて、人であれ家畜であれ、わたしのために聖別せよ。それはわたしのものである。」と。ヨブは子どもたちを聖別するために全焼のいけにえをささげました。ヨブは子どもたちを心から愛する父親でした。ですから、「私の息子たちが、あるいは罪を犯し、心の中で神をのろったかもしれない」と思ったからである。」と記されています。またこの「全焼のいけにえ」で使われているヘブル語は、「上る」という意味を持ったことばです。この「全焼のいけにえ」は、神へのなだめの香りとしてささげ物を祭壇の上で焼き、ささげ物すべてが神のものであることを表しました。ですから「神への全き献身」を表しています。先ほど見たノアもそのようにしたことが創世紀8：20に書かれています。「ノアは、【主】のために祭壇を築き、すべてのきよい家畜と、すべてのきよい鳥のうちから幾つかを選び取って、祭壇の上で全焼のいけにえをささげた。」と。そして5節の最後のことばを見ると、「ヨブはいつもこのようにしていた。」と書かれています。ですから、ヨブは神に対して忠実に従う者として、神の前にいけにえをささげ、神を恐れて生活していたということです。これがヨブの信仰の姿でした。

C. ヨブに与えられた祝福 2-4節

そのようなヨブに与えられた祝福が2-4節に記されています。ヨブには10人の子どもが与えられました。4節に、その子どもたちは「互いに行き来し」と記されていますので、きっと兄弟の仲は良かったのでしょう。またヨブは家長として子どもたちをよく教育していると思われます。また3節にはヨブに与えられた財産のことが書かれてあります。ヨブはパレスチナから「東の人々の中で一番の富豪であった。」と書かれてあります。また多くのしもべを持っていました。旧約の時代を生きたあのアブラハムの祝福に対しても、みことばはこのように記してあります。創世記24:35で、アブラハムのしもべがこう言っています。「【主】は私の主人を大いに祝福されましたので、主人は富んでおります。主は羊や牛、銀や金、男女の奴隷、らくだやろばをお与えになりました。」と。これはアブラハムに対する祝福の様子です。

3. サタンの主張 6-12節

さて6節を見ますと、あるものが登場してきます。「サタン」です。このサタンについて6-12節まで記されています。6節には、サタンも天使たちと同じように主の前に立っていました。そして7節では、主の問いに答えてサタンはこのように言っています。「地を歩き巡り、そこを歩き回って来ました。」と。サタンの目的は、神を信じる者に神への不従順さを植え付け、罪をこの世にあふれさせ、神の怒りを受ける者、地獄へ行く者をひとりでも多くつくることです。ですから、サタンは地を歩きめぐってそのような行動をしていたのです。創世記6:5には、「【主】は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった。」と書かれていますし、またペテロも1ペテロ5:8で、「身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。」と述べています。

そのような神とサタンの会話の中で8節に、神はヨブのことを「わたしのしもべヨブ」と言われています。このことばから、神とヨブの親しい関係を見て取ることができます。そして神のことばは続きます。「ヨブがいかに潔白で、正しく神を恐れ、悪から遠ざかって生きているか、そしてヨブのような人物はこの地上にはいない」と神は言われました。

この神のことばを聞いたサタンの反論がこの後、書かれてあります。サタンの本性が明らかになっていきます。まさに「サタン」は酷訴する者、訴える者であり、信仰者の敵です。9節でサタンは「ヨブはいたずらに神を恐れましょうか」と言います。2017年度版にはここは「ヨブは理由もなく神を恐れているのでしょうか。」と書かれてあります。この「いたずらに」ということばと同じヘブル語のことばが、このヨブ記の2:3、9:17、22:6で使われています。そこでは「理由もないのに」という日本語のことばに訳されています。ですから、サタンの主張はこうです。「ヨブがあなたを信じ恐れているのは本物の信仰心からなののでしょうか。いや、そんなことは考えられません。あなたを恐れているのは、ヨブにとって何か得になる理由があるからですよ。ヨブの信仰もきっとご利益宗教なのですよ。」と。

このサタンの主張に沿って10-11節にその理由が記されています。10節には、「垣を巡らす」ということばが出てきます。この意味は、「ヨブの家族や財産に対する神様の特別の保護、または守り」を言い表しています。ですからサタンの言うことは、こうです。「ヨブの信仰心は、ヨブがあなたから多くの祝福を受けたから、そういう信仰心を持ったのです。あなたが、ヨブからあなたの祝福である家族や財産を取り上げたら、ヨブはきっとあなたをのろうに違いありません。」。サタンの考えることは、どうにかして、神が「わたしのしもべヨブ」と呼ばれたそのヨブが、神をのろう者になるのを、神に見せたかったのでしょうか。そこで神はサタンに許可を与えました。12節にこう書かれてあります。

「【主】はサタンに仰せられた。「では、彼のすべての持ち物をおまえの手に任せよう。ただ彼の身に手を伸ばしてはならない。」そこで、サタンは【主】の前から出て行った。」と。いよいよサタンのヨブに対する攻撃が始まるわけですが……。

4. サタンという存在

「サタン」は、私たち人間を超えた存在です。しかし、神ではありません。全知でも全能でもありません。偏在することもできません。そして何よりも、神が許した以上の力を持って何かをするということはないのです。しかし、私たちはこのサタンの存在をしっかりと知る必要があります。なぜなら、私たち人間に罪をもたらした超本人だからです。

創世記3章には、人間に罪がどのようにして入ったのかが書かれてあります。ご存じのように、その最初は、人間に神のことばを疑わせることでした。創世記3：1の後半には「:1……蛇は女に言った。

「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。」と。サタンはエバに疑いを抱かせ、神のことばに従わないようにと誘惑したのです。また創世記3：13を見てみますと、「そこで、神である【主】は女に仰せられた。「あなたは、いったいなんということをしたのか。」女は答えた。「蛇が私を感わしたのです。それで私は食べたのです。」———こういうことが起きたということ、私たちは創世記の箇所から教えられます。サタンはアダムとエバを誘惑することに成功したのです。このようにして私たち人間に罪が入りました。パウロは罪が私たち人間に及んだことをローマ5章で述べています。ローマ5：12、18－19に「:12 そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がったのと同様に、———それというのも全人類が罪を犯したからです。」「:18 こういうわけで、ちょうど一つの違反によってすべての人が罪に定められたのと同様に、一つの義の行為によってすべての人が義と認められて、いのちを与えられるのです。:19 すなわち、ちょうどひとりの人の不従順によって多くの人が罪人とされたのと同様に、ひとりの従順によって多くの人が義人とされるのです。」と書かれています。

今ここにいる私たちも、かつてはこのサタンの支配のもとにいました。パウロはそのことをエペソ2：1－2でこう記しています。「:1 あなたがたは自分の罪過と罪の中に死んでいた者あって、:2 そのころは、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。」と。皆さん、サタンは本当に狡猾な存在です。なんと、主をも誘惑しようとしていました。そのことがマタイ4章、またルカ4章に記されています。サタンがイエス様をこのように誘惑したことが書かれています。マタイ4：9には、サタンが「言った。「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。」と。なんとサタンは高慢なものなのでしょうか。

しかしこのサタンの姿は、サタンがサタンとなった理由を見れば私たちはよく理解できます。皆さん、イザヤ14：12－15をぜひ後で読んでみてください。サタンは、かつては最上の天使でした。その最上さゆえにサタンは自分を誇り、自分が神になろうと思ったのです。しかし神はそのサタンを天から空中に落とされました。ですから、彼は空中を支配する存在となったのです。この「サタン」は、さまざまな呼び名で呼ばれています。悪魔、試みる者、誘惑者、悪い者、告発者、敵、悪霊どものかしら、この世を支配する者、空中の権威を持つ支配者、そしてベルゼブルなど。

またこのサタンの行為は、ヨブ記以外の旧約聖書にも記されています。I歴代誌21：1にはこう書かれてあります。「ここに、サタンがイスラエルに逆らつて立ち、ダビデを誘い込んで、イスラエルの人口を数えさせた。」と。実はこの人口調査は神のみこころではありませんでした。しかしダビデはこの人口調査を行ったのです。I歴代誌21：8にはダビデのことばが記されています。「そこで、ダビデは神に言った。「私は、このようなことをして、大きな罪を犯しました。今、あなたのしもべの咎を見のがしてください。私はほんとうに愚かなことをしました。」と。ダビデをそそのかしたのは、サタンです。またゼカリヤ3：1－2には、「:1 主は私に、【主】の使いの前に立っている大祭司ヨシュアと、彼を訴えようとしてその右手に立っているサタンとを見せられた。:2 【主】はサタンに仰せられた。「サタンよ、【主】がおまえをとがめている。エルサレムを選んだ【主】が、おまえをとがめている。これは、火から取り出した燃えさしではないか。」と。

このように旧約の時代もサタンは働いていました。誘惑を重ねていたのです。また旧約だけでなく、新約にもサタンの活動が記されています。使徒5：1－11には、皆さんもご存じのアナニアとサツピラのことについて書かれてあります。5：3ではペテロがこう言っています。「……「アナニヤ。どうしてあなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて、地所の代金の一部を自分のために残しておいたのか。」」またパウロもIテサロニケ2：18で「それで私たちは、あなたがたのところに行こうとしました。このパウロは一度ならず二度までも心を決めたのです。しかし、サタンが私たちが妨げました。」と述べています。

「サタン」は常に、神への敵対者、神の計画を破壊する者として描かれています。「みことばが道ばたに蒔かれるとは、こういう人たちのことです——みことばを聞くと、すぐサタンが来て、彼らに蒔かれたみことばを持ち去ってしまうのです。」(マルコ4：15)。またイエス様がこの世に来られた目的の一つ、それは、「……神の子が現れたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです。」と、ヨハネはIヨハネ3：8で述べています。また、信仰者に対するサタンの攻撃、サタンとの戦いがあることは事実であると、パウロもペテロも述べています。パウロはエペソ6：12で「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。」と言い、ペテロは先ほども読んだIペテロ5：8－9で「:8 身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。:9 堅く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい。……」と述べています。皆さん、「悪魔」は変装もします。「しかし、驚くには及びません。サタンさえ光の御使いに変装するのです。」(IIコリント11：14)、なんと悪知恵に長けたものか。

しかしサタンの活動はヨブ1：12から明らかのように、神が許された範囲の中でのことです。そうは言っても、私たちは安心してはダメです。このサタンは、現実的な存在です。いつも神に悪意を持って敵対する者です。ですから、私たち信仰者に対してもその戦いを挑んでくるのです。私たちはどのようにしてこのサタンとの戦いに立ち向かうべきか、パウロはエペソ6章で詳しく記しています。ぜひエペソ6：10－17を読んでください。

皆さんはこのようなことわざを知っているでしょうか。「敵を知り、己を知れば、百戦危うからず」——これはもともと、“孫子の兵法”から来たと言われています。その意味は「敵や相手の実情、状況であったり、実力であったり、特性……そういうものをよく理解すること、そして、自分自身をよく理解するならば、100回戦っても負けることはない」という意味です。私たちの霊的敵であるサタンを知ることは、私たちの信仰に堅く立つことにおいても絶対に欠かせないことです。私たちはこの地上にいる限り、常に、このサタンとの戦いの中にいるからです。

5. 私たちの宣教の働き

私たちの宣教の働き——私たちがみことばを述べ伝える目的は、「サタンに支配されている人々が、神に立ち返ることの重要性を知ること」です。使徒26：18には、「それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中にあって御国を受け継がせるためである。」と書いてあります。先に救われた者として、私たちはパウロやペテロと同じようにこの働きを、主から託されています。すべてのクリスチャンが、です。イエス様はそのよみがえりによって死に勝利されました。それは、サタンに勝利されたことを明らかにしています。私たちもイエス様を信じる信仰によってサタンに打ち勝つ者となった、とみことばが約束しています。「:4 ……神によって生まれた者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。:5 世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。」(Iヨハネ5：4－5)と。

私たちはきょうヨブ1：1－12から、ヨブの信仰の姿を見、ヨブを神に訴え攻撃しようと謀るサタンを見ました。何度も何度も皆さんに訴えましたけれども、サタンは架空の存在ではありません。聖書

が教えるとおりに、彼は実在する霊的存在です。彼は悪霊という手下を支配下に置いています。そして神に敵対し、信仰者を攻撃してその信仰を奪い取ろうとする者です。次の機会には、このサタンのヨブに対する攻撃と、それを受けたヨブがどのように対応したのかを見ていきたいと思っています。

「正しい者にも苦しみがあります。その時、あなたは何に目を留めますか？」——これがヨブ記のテーマです。ヨブ記は42章までありますが、42章の最後にヨブの告白のことばが記されていますので、そのことばを見て終わりたいと思います。42：2、5－6をお読みします。「：2 あなたには、すべてができること、あなたは、どんな計画も成し遂げられることを、私は知りました。」「：5 私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。：6 それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。」——これがヨブの信仰告白でした。これからこのヨブ記を学んでいって、いつの日かこの42章をまた皆さんと一緒に学ぶことを期待しています。